

はらかな尾瀬（その1） —尾瀬の自然と環境保全—

鈴木 實

尾瀬は東京の北約 140 km の群馬県と福島県、新潟県にまたがる本州のほぼ中央に位置する地域である。日光国立公園のうち「尾瀬地域」として、昭和 9（1934）年に我が国 4 番目の国立公園として指定されている。

尾瀬ヶ原及び尾瀬沼を中心とする集水域の山岳、森林及び湿原で構成され、尾瀬ヶ原は高層湿原を主体とする湿原としては我が国最大である。周囲の山岳と湿原が織りなす景観は広大で美しく、季節により様々な花が見られるなど湿原特有の動植物に恵まれた貴重な自然環境を有している。

一般に「尾瀬」と呼ばれている地域は、国立公園特別保護地区であり、文化財保護法による特別天然記念物にも指定されている。面積は約 9000 ha あり、そのうち約 7 割を東京電力株が所有しているが、国立公園の中でこのように一つの企業がこれ程広い面積を所有している例は珍しい。国、県などの地方自治体や地域の人々と共に一所有者として東京電力株及びグループ企業である尾瀬林業株も、尾瀬の貴重な自然環境保全に永年力を入れて取り組んできている。これら多くの人々の活動の結果、2005 年 11 月には「世界的に貴重な湿地」として、ラムサール条約に登録され世界に認められたところである。ここでは、前編（その 1）として尾瀬の昔から今へと続く歴史と貴重な自然の姿の一端について紹介する。尾瀬の自然環境を守る様々な取り組みについては後編（その 2）で紹介する予定である。

キーワード：尾瀬沼、尾瀬ヶ原湿原、燧ヶ岳、至仏山、アヤメ平、池塘・掬水林、浮島、高層湿原、湿原植物、食虫植物

1. 尾瀬の昔と今

尾瀬の自然やその環境保全活動の話題に入る前に、この尾瀬と人間との係わりは昔はどのようなであったのか、少しふれてみたい。

地域の言い伝えなどによると、尾瀬の群馬県側の上州戸倉と福島県側の会津檜枝岐は、いずれも奥深いところではあったが、この 2 つの地域を結ぶ道が一千年もの昔からあった。その当時はきこりや猟師の通う山道であったと考えられるが、時代が進むにつれて、道幅も広くなり、やがて上州方面では「会津街道」、会津方面では「沼田街道」と呼ばれる重要な通い路となっていた。

この「会津・沼田街道」は、会津と上州の交易の道で中間点の尾瀬沼畔に物資交換の小屋が設けられていたという。また、尾瀬にまつわる話として、西暦 1100 年代頃には、安部貞任の一族であった尾瀬大納言、尾瀬中納言、尾瀬三郎房利らがこの地域に住んでいたという言い伝えもある。

明治時代には、20～30 年にかけて登山家の小暮理太郎氏、長蔵小屋の平野長蔵氏、植物学者の早田文蔵

博士、武田久吉博士、檜枝岐村の星大吉氏などが尾瀬に登山、探検、調査し、その報告を世に出した結果、尾瀬が広く社会に知られることとなった。明治 40（1907）年代以降大正、昭和にかけて尾瀬を訪れる人は増加していき、昭和 9（1934）年には、日光国立公園の一部に指定された。その後太平洋戦争時代をへさんで昭和 20 年代（～1955 年）までは社会情勢を反映して訪れる人は極めて少なくなった。昭和 24（1949）年には、尾瀬をテーマとした NHK ラジオ歌謡「夏の思い出」（江間章子作詩、中田喜直作曲）を石井好子さんが謡い、戦後の人々に夢と希望を与えた。この歌は国民的叙情歌として今も多くの人々に親しまれている。

尾瀬の貴重な自然についての認識も一段と高まり、昭和 28（1953）年には、国立公園特別保護地区、更に昭和 35（1960）年には文化財保護法による特別天然記念物の指定を受けるなど自然の稀少価値が広く社会に認められるようになった。

昭和 30（1955）年代からは、いわゆる“尾瀬ブーム”の到来で尾瀬は再びかつての賑わいを取り戻した。平成 8（1996）年には、これ迄の入山者数の最多記録となる年間約 65 万人もの多くの人々が訪れるようにな



図一 尾瀬地域概要図

った。

その後、自然保護のための入山規制が行われた影響もあり、平成 17 (2005) 年の入山者は約 32 万人まで減少したが、平成 18 (2006) 年は約 34 万人と若干ではあるが増加した。

一方、東京電力(株)など電力会社との関わりについて見ると、明治 36 (1903) 年に国のプロジェクトとして尾瀬の豊富な水を利用した水力発電計画が立ち上がり当時の利根発電(株)が土地を、関東水電(株)が水利権(水を利用する権利)を取得した。

昭和 26 (1951) 年に東京電力(株)が最終的に権利を引き継ぐが、その後、水利権については平成 8 (1996) 年に放棄し、所有土地の管理と自然の保護保全活動については現在も引続き積極的に取り組んでいるところである。実際には、グループ企業の尾瀬林業(株)が、その森林、湿原などの保全、緑化を請け負い実施している。図一 1 に尾瀬地域の概要を示す。

2. 尾瀬の自然

(1) 尾瀬とその湿原の生成

尾瀬は太古から長い年月の火山活動によって形成され、数万年前には尾瀬ヶ原は既に、至仏山や景鶴山などの山に取り囲まれた谷間であった。その後、最終的に燧ヶ岳が何回も噴火して、川をせき止め、湖をつくったことが、現在の尾瀬の形成に重要な影響を与えた。

この湖(古尾瀬ヶ原湖)は、その後数千年にもわたる長い年月の間に周辺の山地から流出する土砂や噴火活動による落下堆積物で水域をしだいに狭められ、それに伴う水生・沼沢植物の繁茂、枯死、泥炭化、堆積



写真一 燧ヶ岳と尾瀬ヶ原

①自然堤防の後背地に水がたまり湿潤化します



②ヨシやミツガシワなどが生育し泥炭層を形成していきます



③泥炭層の上にミズゴケなどが生育し湿原となります



図二 湿原の生成過程

の繰り返しで多くの池塘を残す現在の尾瀬ヶ原の姿になった、と考えられている。

尾瀬ヶ原湿原はおよそ 8000 年前からでき始めたといわれている。表面はミズゴケなどで覆われているが、この部分はわずか数 cm でその下は泥炭層となってい

る。湿性植物は枯死後、通常は腐食、分解するが、標高 1400 m の「古尾瀬ヶ原湖」では、寒冷（現在でも年平均気温が 4.6℃）なため、分解せず、堆積して泥炭層を形成したものである。

この泥炭の堆積は、1年で 1 mm 前後であると言われており、尾瀬ヶ原の中心にある中田代の泥炭層には約 6000 年の歴史が秘められていることになる。写真—1 に燧ヶ岳を背景にした尾瀬ヶ原湿原を示す。

湿原には表面は湿原化しても泥炭層がまだ薄く水面下にある低層湿原、泥炭層が厚く広く堆積しかつての水面より高く盛り上がった状態の高層湿原、これらの中間的な状況にある中層湿原がある。図—2 に湿原の生成過程を示す。

(2) 池塘、浮島と拋水林

尾瀬ヶ原には、至仏山や燧ヶ岳を映す鏡のような池塘、広い湿原に点在する小さな池が大小合わせると 1800 個はあると言われている（尾瀬保護財団による）。これは湖水が退化、湿原化する過程で、泥炭層の発達が部分的にさまたげられたり未発達なため水面が残されているもので、水深は数 mm から数 m のものまでさまざまである。

こうした池塘の中には、「浮島」と呼ばれる水面を漂い動く小島を多く見かける。

浮島の生成要因としては、一つは湿原の縁が^{へり}ちぎれて水面に漂い出たものともう一つは、池塘底部の泥炭層がメタンガスなどの浮力で剥離浮上したのがあると考えられている。池塘の名は中国では、「池塘春草の夢」などと詠われており、尾瀬では、武田久吉博士の命名といわれている。

尾瀬一帯の森林は低山帯に属する広葉樹林と亜高山帯に入る針葉樹林に大別され、両者の境は標高



写真—2 池塘と拋水林の一部

1400 m ~ 1800 m と大きな幅をもちそれぞれの場所・地域・地形で異なる。それ以上の高さでは高山植物が中心となる。

尾瀬に特有なものとして拋水林がある。これは湿原の川が周囲の山から土砂や有機物を運び河岸に堆積させたため、その部分だけが富栄養で乾燥気味となり、樹木が生育できるようになってできた樹林で、川の水に抛ってできたという意味で拋水林といわれている。写真—2 に池塘と拋水林の一部を示す。

(3) 尾瀬沼と尾瀬の滝

尾瀬沼は群馬、福島両県にまたがる火山堰止湖であり、尾瀬ヶ原湿原と対をなす燧ヶ岳の麓にある美しい沼である。海拔 1665 m の高地にあり、水深 8.5 m（最深部）、周囲約 6 km の沼で、流入水量の最大のもののは大江川であり、流出側は沼尻平から沼尻川が尾瀬ヶ原へと流れている（写真—3：燧ヶ岳を水面に映す尾瀬沼）。



写真—3 燧ヶ岳を水面に映す尾瀬沼

尾瀬沼、尾瀬ヶ原のすべての河川が集まり「平滑の滝」「三条の滝」となって福島県の奥只見湖や田子倉ダムなどで発電された後、阿賀野川と合流、新潟市内で日本海に注ぐ。

平滑の滝は、滝というより川全体が波立ち、泡だつて流れる。川幅も 20 m 位でくびれたかと思うと 80 m 位に広がったりと変化を見せながら延々 500 m 以上も続く。

更に 1 km 程下流にあるのが、三条の滝で、うっそうとした森林の中に、130 m の落差をごう音としぶきをあげて一気に落ちる雄大さは、日本でも有数である。

(4) 尾瀬の植物

尾瀬のもつ大きな魅力の一つとして、多様でしかも

希少な植物がある。豊富な湿原植物、水生・沼沢植物、食虫植物、高山植物をはじめ尾瀬で発見され命名された原産植物の種類の多さや数多い北方系植物の南限地としてもよく知られている。

これら植物のいくつかを以下に挙げる。

湿原植物では、なんとといっても「ミズバショウ」と「ニッコウキスゲ」更に「ザゼンソウ」「ヒツジグサ」「ワタスゲ」などがあるほか世界的にもめずらしい食虫植物も多く、葉から粘液を出し、虫を葉に巻き込んで捕らえる「モウセンゴケ」「ナガバノモウセンゴケ」や水中で弁と繊毛付の補虫袋で捕らえる「タヌキモ」の仲間などが見られる。

これらのうちから、尾瀬を代表する花をいくつか以下で紹介する（写真—4）。

・ミズバショウ

尾瀬を象徴する花である。サトイモ科の仲間です。雪解け直後の5月下旬から6月上旬にかけて咲く花。純白の花びらのように見えるのは花を保護する役目の仏炎苞（ブツエンハウ）で、中心の棒状（花茎：カケイ）に密生する黄色い部分が花である。

場所によっては葉が1mを超える大きさになるが、これは、川筋や山際などの豊富な養分が運ばれてくる場所で見られる。ミズバショウは、種が川に流れたり、ツキノワグマなどが実を食べ、あちこちで糞をするこ

とで生育の範囲を広げていく。

・リュウキンカ

ミズバショウとほぼ同じ時期に湿原の水の流れに沿ったところに咲く花である。名前の由来は、花の茎が直立すること、鮮やかな黄色い花が金色の花に見えることから、立金花（リュウキンカ）と言われている。

・カキツバタ

6月下旬頃から湿原に濃い紫の花が咲いているが、それは、カキツバタかヒオウギアヤメで、両方ともアヤメの仲間。カキツバタは、一本の茎からひとつの花が咲き、ヒオウギアヤメは、茎の先端が分かれば複数の花をつける。また、花びらの中央部分が黄白色のくさび形をしているものが「カキツバタ」で、紫色の文目（アヤメ）模様が「ヒオウギアヤメ」である。

・ニッコウキスゲ

ミズバショウとともに尾瀬を代表する花の一つである。梅雨が明けた7月上旬頃から下旬にかけて見られる花。中旬頃には湿原を黄色のじゅうたんで覆う。ニッコウキスゲの花の寿命は一日で、一株に6～7個の花芽が付くが、このうち咲いているのは一輪だけで、できるだけ長い期間花を咲かせ、昆虫に花粉を運んでもらう工夫をしていると考えられている。

・ヒツジグサ

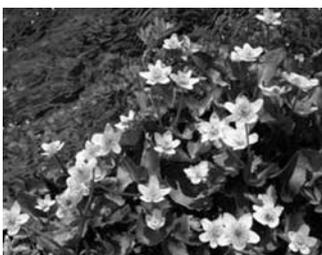
7月の下旬から9月の上旬に尾瀬ヶ原の池塘の中で



ミズバショウ



ニッコウキスゲ



リュウキンカ



カキツバタ



ヒツジグサ



エゾリンドウ

写真—4 尾瀬に咲く花々

見られる花である。名前の由来は、昔の時刻で未の刻（午後2時）頃に花が開花することから、未草（ヒツジグサ）と名づけられた。実際にはもっと早い時刻（12時頃）には、開花しているようである。

・エゾリンドウ

尾瀬は、秋になるとサワギキョウやエゾリンドウなど紫色系の花が多く観られる。エゾリンドウは、30 cm ~ 80 cm の茎に濃い青紫色の花をつける。尾瀬に咲く最後の花でこの花が終わると、長い冬が訪れる。

(5) 尾瀬に住む動物

尾瀬に住む動物としてよく知られているのは、クマであるが、このほか小動物も多く、多様で希少種が多い。渡り鳥も尾瀬に飛来しており、尾瀬の湿原を守ることは、貴重な鳥たちを保護することにつながる。また、トンボも約40種類と多く、これらトンボ類、甲虫類も多様である。

ここでは尾瀬で見かける可愛らしい小動物のいくつかを紹介する（写真—5）。

オコジョ：オコジョは、体調が20 cm ほどのイタチ科の仲間。木道の隙間から顔を出したり、燧ヶ岳の山頂付近で目撃されているが、出会うことがとても難しい。冬になると全身が白色の毛になり、冬眠することなく、一年中尾瀬の中を歩き回っている。

ヤマネ：体長6 cm ほどのリスやねずみの仲間。国の特別天然記念物に指定されている。冬には体温を0℃近くまで下げて1年の半分を眠って過ごす。このため「冬眠鼠」と書いてヤマネと読む。

イワツバメ：春先に東南アジアから日本に渡り、雛を生み子育てを行う。山小屋の軒下などに巣を作り、7月になると生まれた雛に親鳥が餌を運ぶ様子が観察できる。普通のツバメよりも尾が短く、飛んでいる時に腰の白さが目立つことで、他のツバメと見分けることができる。

オオジシギ：オーストラリアから渡ってくる鳥で、湿原に急降下することから「カミナリシギ」とも言われている。

ハッチョウトンボ：ハッチョウトンボは日本最小のトンボで、体長は15~20 mm ほどの大きさである。その名前の由来は、余りに小さいため、“一生で八町（880 m）しか飛べないだろう”とのことからつけられたと言われている。

(6) 尾瀬の四季

尾瀬は4月下旬から5月上旬にかけて、各山荘、休憩所がオープンする。春、雪が解けるとミズバショウとリュウキンカが咲き始め、5月中旬頃からこれらの花が最盛期を迎え、5月下旬から6月上旬が見頃となる。



オコジョ



ヤマネ



イワツバメ



オオジシギ



ハッチョウトンボ

る。

夏は、ニッコウキスゲ、ワタスゲの大群落で見渡す限りの広大なお花畑となる。特に夏の尾瀬を代表するニッコウキスゲは、7月下旬をピークに尾瀬ヶ原、大江湿原などを黄色の絨毯のように覆う。

秋には山々の樹々が黄や真紅に彩られると同時にリュウキンカなど湿原の草が赤く紅葉し、人々に深い感動を与える。

早足でやってくる冬、11月上旬には尾瀬は冬の眠りに入るが、この時期自然の動植物は春を迎えるための準備に入り、雪の下などで大切な生命の営みを続けることとなる。

JCMA

《参考文献》

白簾史朗：尾瀬＝その美しき自然 大和書房 1984年8月
 (財)尾瀬保護財団 設立10周年のあゆみ 2006年(平成18年)3月
 尾瀬林業(株) 創立五十年史 2001年(平成13年)2月
 尾瀬林業(株) CSRレポート2006 2006年6月(ホームページ
<http://www.tgn.or.jp/oze/info/index.html> 参照)

【筆者紹介】

鈴木 實(すずき みのる)
 尾瀬林業株式会社
 常任監査役



平成 19 年経済産業省企業活動基本調査にご協力ください

— 経済産業省 —

経済産業省では、我が国企業における経済活動の実態を明らかにし、経済産業政策等各種行政施策の基礎資料を得ることを目的として、平成4年以降「経済産業省企業活動基本調査」(指定統計第118号)を実施しており、平成19年も実施いたします。

調査の対象は、別表に属する事業所を有する従業者50人以上かつ資本金3,000万円以上の会社で、会社全体の数値をご報告していただきます。

調査票は、平成19年5月中旬に郵送しますので、平成19年7月15日までに提出してください。また、紙調査票によるほか、インターネット

トからオンラインで提出することもできます。オンラインの利用申込み資料は、調査票等の調査関係書類に同封いたします。

調査の結果は、平成20年3月に速報の公表を予定しており、ご報告いただいた会社におかれましては、当省で作成した統計情報を送付させていただきます。

皆様から提出いただいた調査票につきましては、統計法に基づき調査内容の秘密は厳守され、統計を作成する目的以外には使用されることはありませんので、調査に対するご協力をお願いいたします。

(別表)

鉱業、製造業、電気業、ガス業、卸売業、小売業、クレジットカード業・割賦金融業、一般飲食店のほか、下記の産業の括弧内の業種が対象になります。

- 情報通信業(ソフトウェア業、情報処理・提供サービス業、インターネット附随サービス業、映画・ビデオ制作業、テレビ番組制作業、新聞業、出版業)
- 教育、学習支援業(外国語会話教室、フィットネスクラブ、カルチャー教室(総合的なもの))
- サービス業(デザイン・機械設計業、写真業、エンジニアリング業、学術・開発研究機関、洗濯業、その他の洗濯・理容・美容・浴場業、冠婚葬祭業(冠婚葬祭互助会を含む)、写真現像・焼付業、その他の生活関連サービス業、映画館、ゴルフ場、公園、遊園地・テーマパーク、ボウリング場、廃棄物処理業、機械等修理業、産業用機械器具賃貸業、事務用機械器具賃貸業、自動車賃貸業(レンタルを除く)、スポーツ・娯楽用品賃貸業、その他の物品賃貸業、広告業、商品検査業(非破壊検査業を除く)、計量証明業、民営職業紹介業、ディスプレイ業、労働者派遣業、テレマーケティング業、その他の事業サービス業)